

2 動物意匠のある土器について

今回の調査では、動物意匠の付いた北筒Ⅲ式土器がN-51・52区Ⅱ層中から出土した(図Ⅳ-3・6)。ここでは道内における縄文時代～続縄文時代の動物意匠付土器の類例から、本例の位置付けを考えてみたい。なお、類例に関しては宇田川洋の研究(宇田川 1989)を基本とし、さらに近年出土した資料を追加した。また、実測図のないものは今回扱っていない。

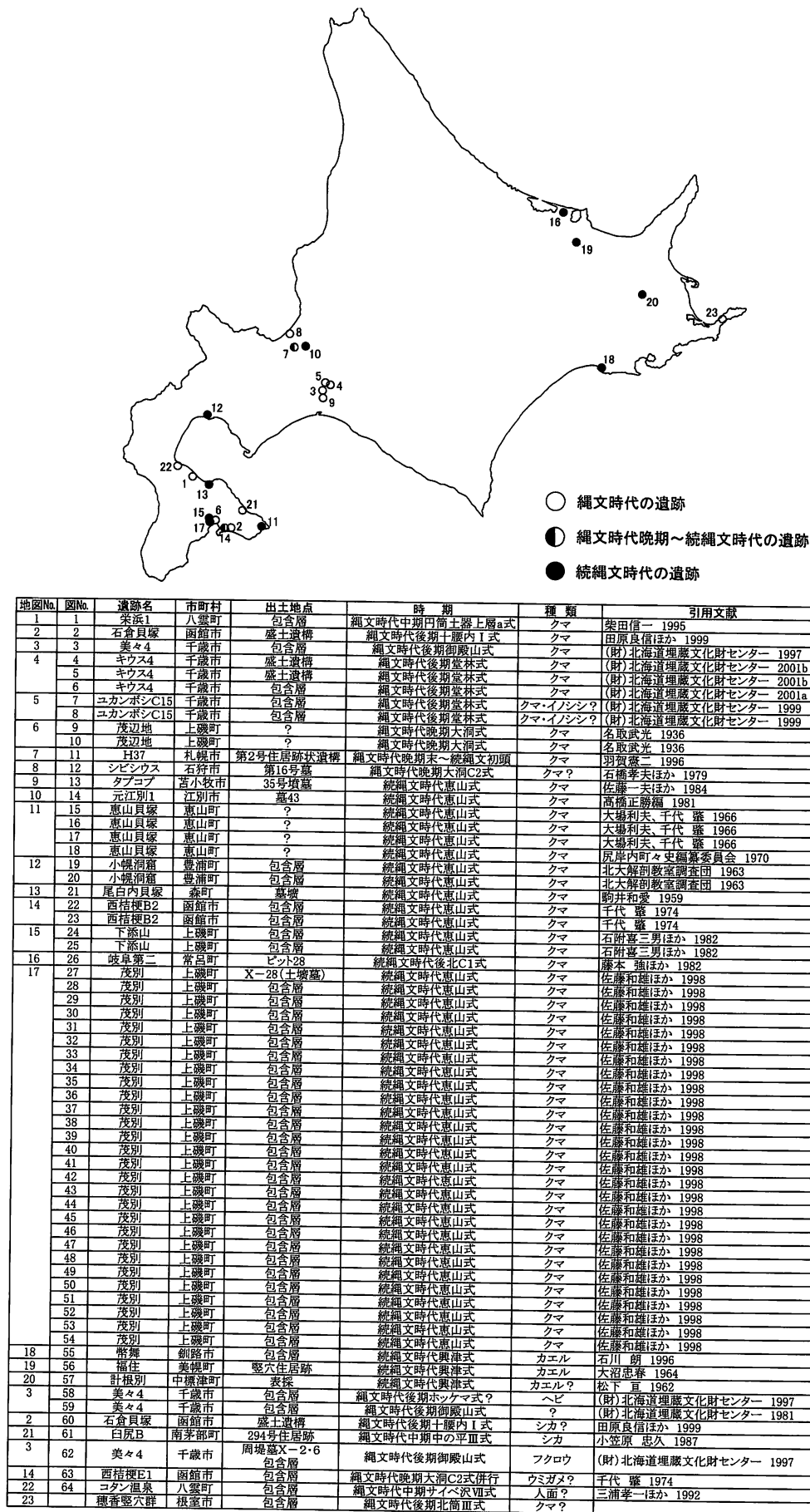
現在北海道内において、動物意匠付土器は65例確認されている(図Ⅵ-2)。道東地域5例、道央地域13例、道南地域47例で、道南地域が7割以上を占める。時期別では縄文時代19例、縄文時代晩期～続縄文時代1例、続縄文時代45例と続縄文時代に多く見られる。

時期ごとにみていくと、最も古い例は縄文時代中期、八雲町栄浜1遺跡で円筒土器上層a式土器の口唇部突起にクマと考えられる意匠が付けられた土器が出土している(1)。また、南茅部町白尻B遺跡で中の平Ⅲ式土器にシカと推定される意匠を描いた例(60)がある。縄文時代後期前葉ではと函館市石倉貝塚で十腰内Ⅰ式のクマを意匠した突起を有する土器(2)、シカ?と考えられる動物意匠が描かれた絵画土器(60)が出土している。後期中葉ホッケマ式では千歳市美々4遺跡で2組のヘビ?が沈線で描かれた絵画土器(58)が出土している。後期後葉の堂林～御殿山式にかけては比較的資料が多い。堂林式では千歳市キウス4遺跡出土の、クマを意匠とした香炉形土器先端部と考えられる土器片(5・6)と、注口土器の破片(4)がある。千歳市ユカンボシC15遺跡でも同様の例があり、ここでは上下顎の部分が出土している(7・8)。御殿山式では千歳市美々4遺跡でクマを意匠した土器の突起(3)、フクロウを意匠した貼り付けを有する土器(62)や意匠動物不明の土器の突起(59)が出土している。縄文時代晩期大洞式C₂式では、石狩市シビシウス遺跡のクマを意匠したと考えられる把手状の突起を有する鉢(12)、函館市西桔梗E₁遺跡で報告者がウミガメとしている土器の把手が出土している(63)。他にも大洞式のものとして、上磯町茂辺地出土のクマを意匠した土器の把手が挙げられる(9・10)。縄文時代晩期～続縄文時代では、札幌市H-37遺跡で、口唇上にクマと考えられる動物意匠の突起が付く鉢形土器(11)が出土している。続縄文時代前半期の道南地域例は全て恵山式で、全時期を通じて最も資料が豊富に見られる。上磯町茂別遺跡ではクマを意匠とした突起が、完形の鉢1個体を含めて28例出土している(27～54)。他にも苫小牧市タブコブ遺跡(13)、江別市元江別1遺跡(14)、恵山町恵山貝塚(15～18)、豊浦町小幌洞窟遺跡(19・20)、森町尾白内貝塚(21)、函館市西桔梗B?遺跡(22・23)、上磯町下添山遺跡(24・25)からクマを意匠したと考えられる突起、把手が出土している。道東地域の興津式では、幣舞遺跡出土のカエルと考えられる動物意匠の貼付文が、口縁部に施された深鉢がある(55)。福住遺跡(56)、計根別遺跡(57)でも同様の資料が出土している。後北C₁式においては、常呂町岐阜第二遺跡出土のクマを意匠とした突起を有する完形の深鉢がある。

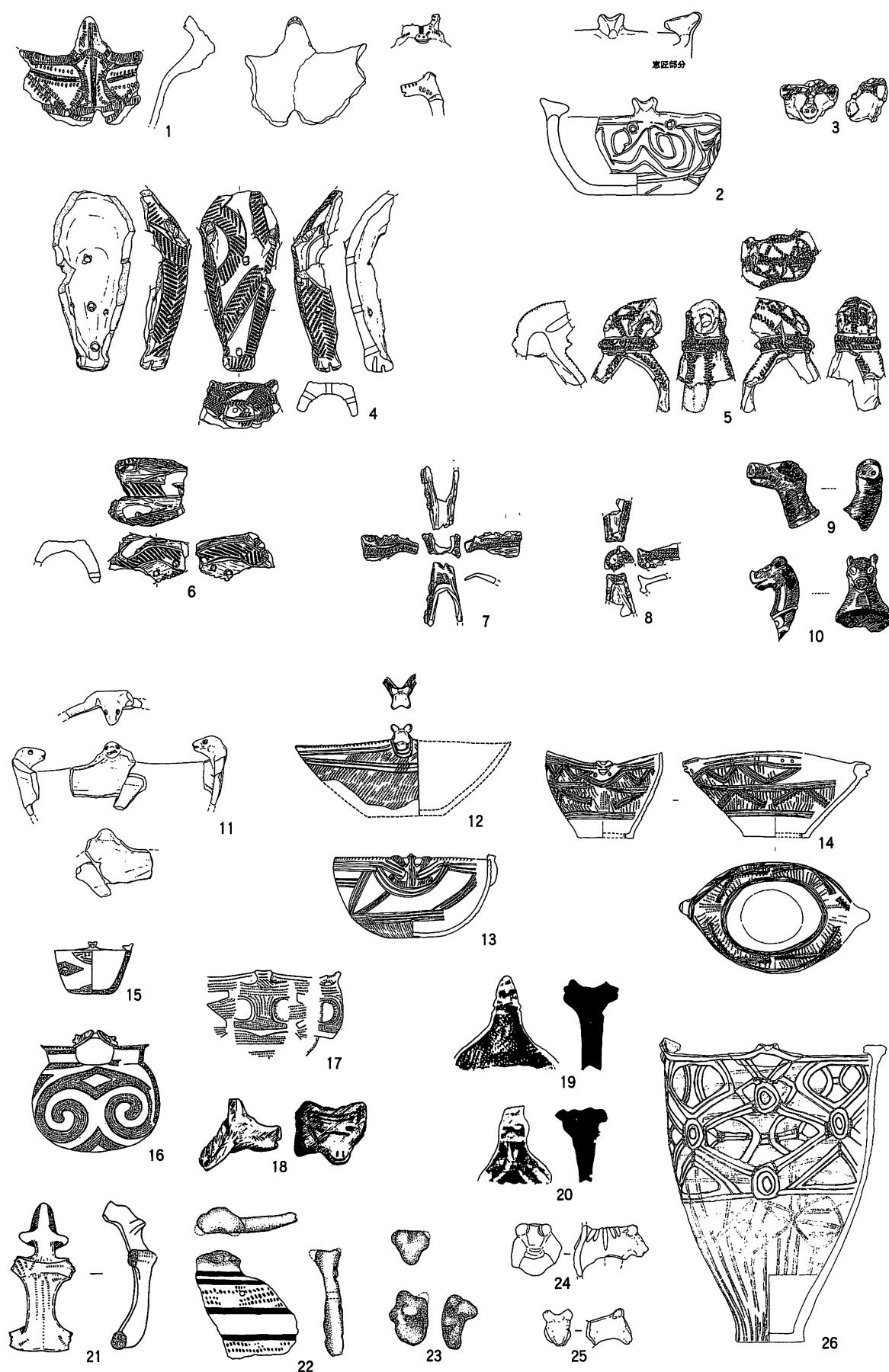
以上各時期の出土例をみたが、動物意匠のある土器は縄文時代中期になって現れ、後期にはクマ、フクロウ、ヘビ等の意匠が現れる等、意匠の多様性が見られる。晩期には土器の把手にクマを意匠するものが見られる。続縄文時代前半期は道央～道南ではクマを、道東ではカエルを意匠する土器が分布し、後北C₁式より後には認められないのが現状である。

穂香窪穴群出土の動物意匠付土器は、道内でも古い時期に属し、現状では道東地域で最も古い資料として位置付けられる。土器の特徴としては動物意匠付きの突起が4ヶ所あり、4ヶ所それぞれが作り分けられている点が挙げられる。意匠動物は、1ヶ所はクマと考えられるが、他の3ヶ所は他の動物の可能性もある。道東地域で縄文時代後期には動物意匠付土器が見られ、これが前後の時代へつながっていく可能性が出てきたことが現状として挙げられる。

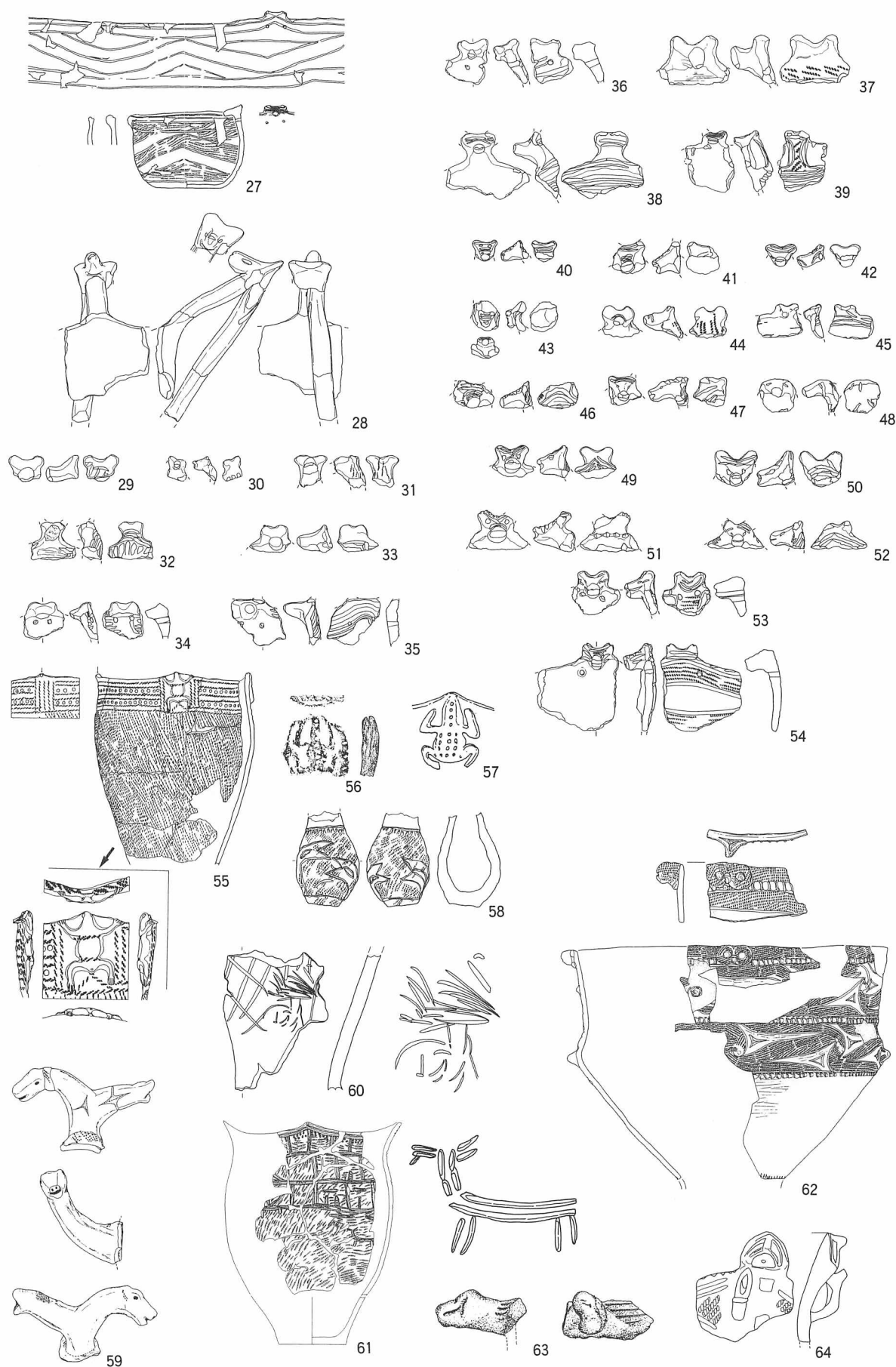
(広田良成)



図VI-2 北海道出土の動物意匠付土器の分布及び一覧



図VI-3 動物意匠付土器 (1)



図VI-4 動物意匠付土器 (2)